



生徒減少期における府立高校の在り方検討会議
～より魅力ある高校教育の推進に向けて～

＝ 第3回検討会議 配付資料 ＝

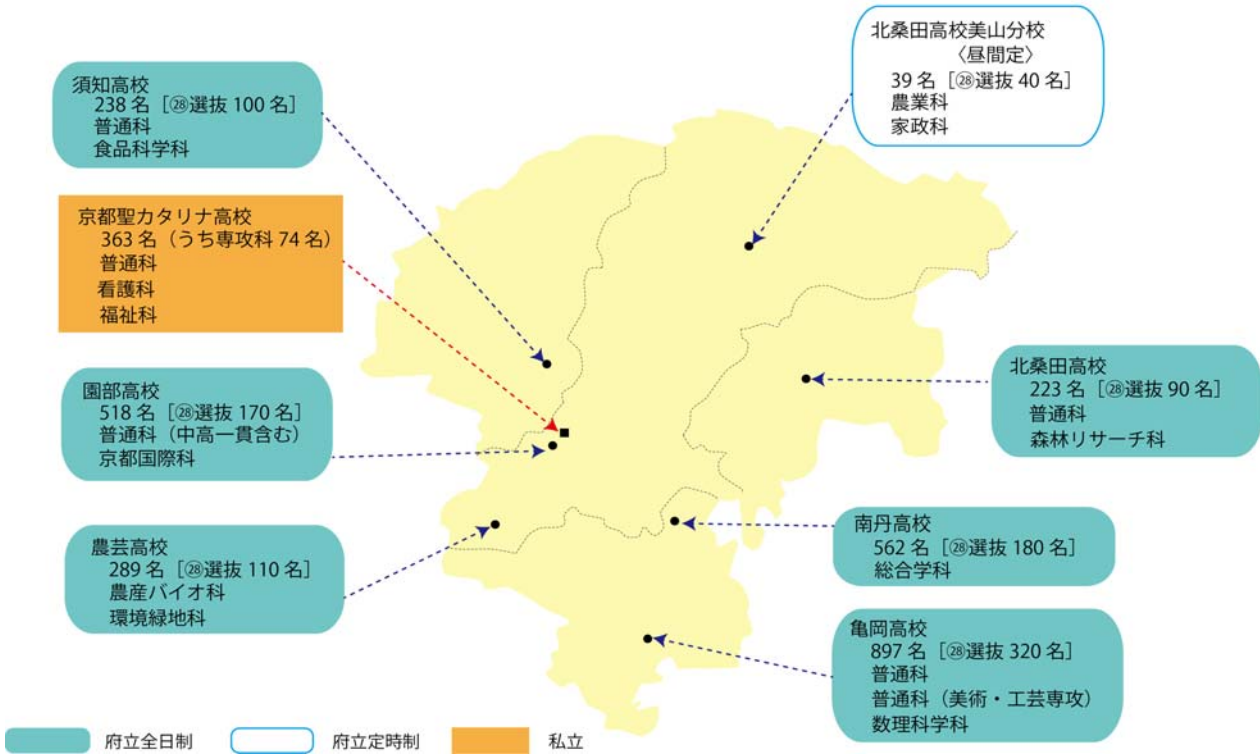
(平成27年9月25日)

資料 No.	名 称
1	口丹・中丹・丹後地域の高校の配置状況等
2	第1回・第2回検討会議における主な意見

口丹地域の高校の配置状況等

口丹地域の高校の配置

※数字は平成27年5月1日現在の全校生徒数(速報値)、[]内は平成28年度入学者選抜募集定員



口丹地域普通科の学区別公立中学校3年生数の推計

※平成27年度=5月1日基本数調査(速報値)によるデータ

※平成28~35年度=平成27年5月1日基本数調査(速報値)による推計データ

学校名	普通科の学区	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年	平成32年	平成33年	平成34年	平成35年
		28年度選抜	29年度選抜	30年度選抜	31年度選抜	32年度選抜	33年度選抜	34年度選抜	35年度選抜	36年度選抜
北桑田	京都市右京区 (周山中学校区)	37	39	38	31	43	39	39	31	33
	南丹市 (美山中学校区)	35	24	31	23	13	32	20	17	25
亀岡	亀岡市	863	862	831	800	754	760	728	772	767
園部	南丹市 (美山中学校区除く)	283	275	255	261	244	235	234	249	209
須知	京丹波町	119	134	107	115	102	106	94	89	87
口丹地域 計		1,337	1,334	1,262	1,230	1,156	1,172	1,115	1,158	1,121

口丹地域の府立高校(全日制)の学級規模の推計

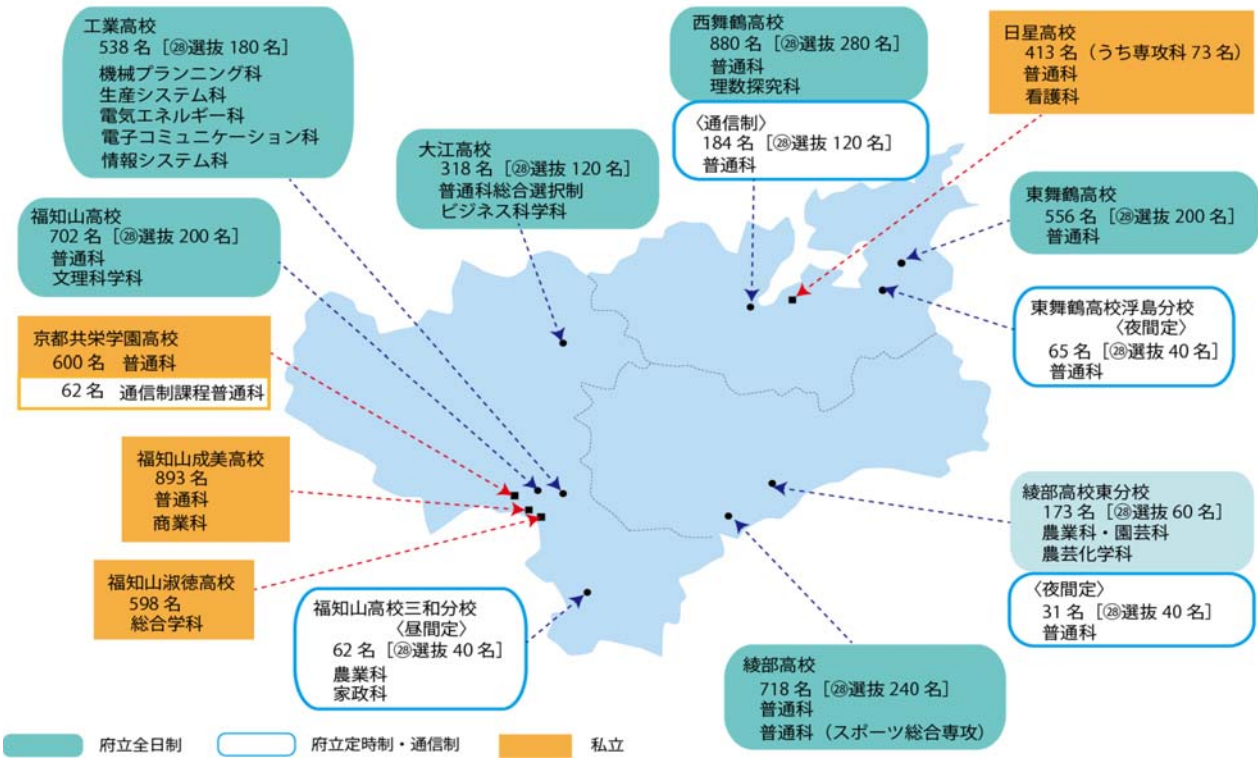
※推計方法は第2回会議で配付の資料2参照

学校名	年度 選抜年度	27		35	
		27	28	35	36
北桑田	普通科・森林リサーチ科	3 cl	90	2 cl	70
亀岡	普通科・普通科(美術・工芸専攻)・数理科学科	8 cl	320	7 cl	280
南丹	総合学科	5 cl	180	4 cl	150
園部	普通科・京都国際科	4 cl	130	3 cl	100
	中高一貫(普通科)	1 cl	40	1 cl	40
須知	普通科・食品科学科	3 cl	100	2 cl	70
募集定員 小計 (a)		24 cl	860	19 cl	710
農芸	農業学科群	3 cl	110	3 cl	110
	うち口丹地域(b) [推計]		65	[推計]	65
計 (c=a+b)			925		775
当該地域の公立中3生数 (d)			1,337		1,121
生徒受入率(c/d)			69.2%		69.1%

中丹地域の高校の配置状況等

中丹地域の高校の配置

※数字は平成27年5月1日現在の全校生徒数(速報値)、[]内は平成28年度入学者選抜募集定員



■中丹地域普通科の学区別公立中学校3年生数の推計

※平成27年度=5月1日基本数調査(速報値)によるデータ
※平成28~35年度=平成27年5月1日基本数調査(速報値)による推計データ

学校名	普通科の学区	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年	平成32年	平成33年	平成34年	平成35年
		28年度選抜	29年度選抜	30年度選抜	31年度選抜	32年度選抜	33年度選抜	34年度選抜	35年度選抜	36年度選抜
綾部	綾部市	362	308	290	290	270	284	274	264	248
福知山	福知山市	701	762	756	662	710	714	670	674	661
東舞鶴	舞鶴市 (青葉・白糸・和田・若浦中学校区)	480	475	442	455	411	419	425	391	420
西舞鶴	舞鶴市 (城南・城北・加佐中学校区)	406	346	307	366	318	286	324	296	295
中丹地域 計		1,949	1,891	1,795	1,773	1,709	1,703	1,693	1,625	1,624

■中丹地域の府立高校(全日制)の学級規模の推計

※推計方法は第2回会議で配付の資料2参照

学校名(分校名)	年度 選抜年度	27		35	
		27	28	35	36
綾部	普通科・普通科(スポーツ総合専攻)	6 cl	240	4 cl	160
綾部(東)	農芸化学科・農業科・園芸科	2 cl	60	2 cl	60
福知山	普通科・文理科学科	5 cl	200	5 cl	180
	中高一貫(文理科学科)			1 cl	40
大江	普通科・ビジネス科学科	3 cl	120	3 cl	90
東舞鶴	普通科	5 cl	200	4 cl	160
西舞鶴	普通科・理数探究科	7 cl	280	5 cl	200
募集定員 小計 (a)		28 cl	1,100	24 cl	890
工業	機械プランニング科・生産システム科・電気エネルギー科・電子コミュニケーション科・情報システム科	5 cl	180	5 cl	180
うち中丹地域(b) [推計]			165	[推計]	165
計 (c=a+b)			1,265		1,055
当該地域の公立中3生数 (d)			1,949		1,624
生徒受入率(c/d)			64.9%		65.0%

丹後地域の高校の配置状況等

丹後地域の高校の配置

※数字は平成27年5月1日現在の全校生徒数（速報値）、〔 〕内は平成28年度入学者選抜募集定員



■丹後地域普通科の学区別公立中学校3年生数の推計

※平成27年度＝5月1日基本数調査(速報値)によるデータ

※平成28～35年度＝平成27年5月1日基本数調査(速報値)による推計データ

学校名	普通科の学区	平成27年 28年度選抜	平成28年 29年度選抜	平成29年 30年度選抜	平成30年 31年度選抜	平成31年 32年度選抜	平成32年 33年度選抜	平成33年 34年度選抜	平成34年 35年度選抜	平成35年 36年度選抜
宮津	宮津市	169	143	136	134	131	138	140	130	114
	伊根町	14	12	13	13	10	6	4	12	9
	与謝野町 (橋立中学校区)	62	42	50	51	44	50	49	50	52
加悦谷	与謝野町 (橋立中学校区除く)	213	152	163	138	170	138	137	123	125
峰山	京丹後市 (峰山・大宮・丹後(豊栄小学校区に限る)・弥栄中学校区)	341	298	301	298	264	259	255	256	246
網野	京丹後市 (峰山高校の学区を除く)	287	254	247	222	214	205	198	195	203
丹後地域 計		1,086	901	910	856	833	796	783	766	749

■丹後地域の府立高校（全日制）の学級規模の推計

※推計方法は第2回会議で配付の資料2参照

学校名 (分校名)	年度 選抜年度	27		28	
		cl	人数	cl	人数
宮津	普通科・建築科	5	190	4	150
加悦谷	普通科	3	120	2	70
峰山	普通科・産業工学科	6	240	4	150
峰山 (弥栄)	農園芸科・家政科	2	40	2	40
網野	普通科・企画経営科	4	150	3	100
久美浜	総合学科	3	90	2	60
募集定員 小計 (a)		23	830	17	570
海洋	海洋学科群	3	100	3	100
	うち丹後地域(b)[推計]		32	[推計]	32
計 (c=a+b)			862		602
当該地域の公立中3生数(d)			1,086		749
生徒受入率(c/d)			79.4%		80.4%

生徒減少期における府立高校の在り方検討会議 ～より魅力ある高校教育の推進に向けて～

＝第1回・第2回検討会議における主な意見＝

◎府立高校（主として口丹・中丹・丹後地域）の今後の在り方や活性化策を検討する上での観点並びに提言など

柱	観点・提言など
<p>■府立高校と地域との結びつき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域における府立高校の役割 ・地域の活性化につながる高校づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・「つなぐ」をキーワードに、地域、人、他の校種などにつながる教育の推進が在り方を考える上で重要である。 ・地域貢献や地域での起業などに気概をもって取り組むチャレンジ精神のある人づくりが大切である。 ・地域創生、地域の人材育成、地域活性化の観点から戦略を考える必要がある。 ・高校は地域の活性化に大きな役割を果たすとともに、小・中学生の目標となっている。これまで培ってきた各高校の取組を継続させるという観点が大切である。 ・学力や文化、スポーツなど各校の特色を地域や小・中学校に発信し、交流などの取組を積み上げていくことが選ばれる学校づくりにつながる。 ・分校の生徒も地域を支える重要な人材。インターンシップの受入など、企業が生徒の社会参加を支援するといったつながりが重要である。 ・高校の部活動は、文化・スポーツ両面で地域の活動の拠点として大きな役割を果たしている。 ・丹後地域での求人がないのではなく、公務員や大学進学に目が向いて、生徒が地元企業を選択していないだけである。結果、必要な人材を他府県から雇用するという大きなミスマッチが生じている。
<p>■教育の質を確保していくための学校規模</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育効果を維持するための最小規模 ・教育内容にそった適正規模 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育の基盤を維持しながら地域に根ざした教育を推進する観点から、数だけで学校の将来像を論じるわけにはいかない。 ・適正規模8学級を基本としながらも、高校生の発達段階を踏まえ、地域に根ざした学校づくりや教育効果を高め、維持するための最小規模を確保する必要がある。 ・高校における教育効果を維持するための独立した学校としての最小規模は3学級と考える。 ・北部地域と南部地域で異なる高大連携や地域事情等を踏まえた教育の内容や適正規模を描く必要がある。 ・教育効果や教育の質の面から適正規模を考えるべきである。 ・学習面や部活動などで生徒が切磋琢磨することで、一定の教育効果が期待でき、また、企業や小・中学校との連携・交流などに今後も取り組める人数・学校規模とすべきである。

柱	観点・提言など
	<ul style="list-style-type: none"> ・ knowledge(知識)、skills(技能)、attitude(態度)の3つの要素を教育開発においては重視すべきである。特に、attitudeが教育効果を測る上では重要である。また、Project-Based Learning (PBL)の形式での地域との関わりをどこまで高校教育の中に落とし込み、教育の質をどう転換するかという観点も必要である。小・中・高・大の各段階において、地域に立脚したPBLや現実の問題に関わる中で教育を行うことの有効性は高い。取り組む内容によって地域との関わり方や適正規模も変わるという観点に立って考える必要がある。 ・ 国が推進する新しい教育を実践していくためには、生徒が切磋琢磨できる一定規模の人数を確保する必要がある。 ・ 学習や部活動などにおいて、自分の持っている能力を高めたいという高校生の期待に応え、多様な機会を保障できるような学校規模とすることも重要である。
<p>■学校再編の考え方や通学配慮</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単純に学校を再編したり、本校を分校化するのではなく、これまでの本校・分校の発想を変えて、既存の高校をキャンパス化して学校名を残すといったことも検討し、キャンパス間で教員が同一校としての認識を共有するとともに、生徒にもそうした意識を持たせるといったことも必要である。 ・ 北部地域における生徒の学びを保障するという観点から、通学バスや寮の整備、通学費の軽減策等といった学びの利便性を向上させる仕組みづくりが必要である。 ・ 公共交通機関による利用しやすい料金設定や運行など、通学に配慮した交通網の整備や交通費の設定なども検討すべきである。
<p>■府立高校と私立高校との関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの地域における公私間の役割分担 ・ 私立高校も含めた適正配置 ・ 魅力ある高校づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公私がともに輝き、切磋琢磨して、京都の教育を担うために、私学も含めた適正配置を検討する必要がある。 ・ 学校経営者としては、地域性も大切だが、北部の生徒が減るのであれば、南部から生徒を集めるといった方策も検討する必要があると考える。例えば、南部の私学が北部の高校を運営すると仮定するならば、南部の生徒を北部へ連れて行き、合同で学習や部活動を行う機会を設けるといった手法も考えられる。 ・ 私学と共存していくためには、むしろ再編しやすい府立高校が生徒数減少に対して柔軟に対応する必要がある。 ・ 私学へのニーズがあってこそ私学の存続を前提にすることができる。公私が切磋琢磨し、生徒や保護者のニーズを踏まえた学校づくりに取り組むことが重要である。 ・ この高校に行きたいと中学生を誘発できるよう、公私ともに各高校が魅力ある学校づくりに努めなければならない。 ・ あんしん修学支援制度はあるものの、学費などの経済的負担が大きいことから私学を選択できないというケースもある。
<p>■専門的な学びや多様な学びの場の保障</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域で求められる職業教育 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域連携や地域貢献の観点からは、普通科より職業に関する専門学科の果たす役割が大きい。地域を元気にしていく戦略の観点で専門学科の在り方を考える必要がある。 ・ 生徒数減少に伴い学校数を減らす場合でも、設置する学科や教育内容には地域色を出すべきである。

柱	観点・提言など
<ul style="list-style-type: none"> ・地域創生につながる学科設置 ・学科の適正配置 ・多様な学びの場の保障 ・分校の役割 	<ul style="list-style-type: none"> ・時代性を踏まえ、地域に積極的に受け入れてもらえる魅力ある教育内容に転換するという観点も必要である。 ・将来就きたい職業も見据え、より専門性に特化した高校の在り方が求められている。子どもが夢を持ってその夢を目標に変えさせてくれるような高校づくりをすべきである。 ・地域の魅力をさらに活かす地域創生の観点からも、観光や福祉、医療、パティシエ養成、地域の自然環境の研究、企画力・商品開発などが学べる学科など、雇用創出や地域の集客力につながるような新たな学科が求められている。 ・府の基幹産業を支える人材育成も府立高校の職業に関する専門学科の大切な役割であり、学科の内容を変えつつも、残すべきは残していく必要がある。 ・同一地域に似かよった学科を設置する高校が競合すると共倒れになる可能性があるため、設置する学科や教育内容を見直すなど、学科の再編についても検討する必要がある。 ・魅力的な教育を推進し、専門的な学びの場を保障する観点から、地域を広く捉え、補助金や通学条件の整備により、生徒を都市部から北部地域に引き寄せる方策なども検討する必要がある。 ・学びを強く喚起する高校も必要である。いわゆる進学校といわれる高校の役割も視野に入れておかなければならない。 <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒減少を踏まえると、今ある分校の存続ではなく、特別な支援を要する生徒や不登校の生徒に対応する多様な学びの場といった分校の果たしている機能を別の形に組み替えて継承していく新たな仕組みを検討する必要がある。 ・分校の役割を本校に移し、多様な学びを保障する新しいコースや学科を設置することなども検討すべきである。
<p>■その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少を学校が変わるチャンスと捉え、どのように教育の質を担保し、どのような教育内容とするかを考えるべきである。 ・特別支援学校の果たしている役割や効果を踏まえ、府立高校の敷地内に生徒が交流できる環境をつくるなど、特別支援学校との連携を深める方策についても考えることが大切である。 ・学校数を減らす場合でも、何らかの形で現在の校舎等を活用するなど、その地域の文化拠点的存在として校舎等を残す手段を考える必要がある。 ・学校の在り方を考える際には、保護者の方々にも納得していただけるものとするといった観点も踏まえておく必要がある。 ・京都市・乙訓地域や山城地域のように高いアクセシビリティをもつ地域でも、絶えず魅力ある教育を発信し、選ばれる学校づくりに努めなければ、希望者が減って学校がなくなるのではないかとといった危惧を地域から抱かれてしまう。 ・高校の選択や将来に向けての進路選択などにおける子どもたちの挑戦意欲の弱さが大きな課題である。